

御獅子様 おししさま

能柄 神能、よどみなくさわやかに、一番目物

素材 各務原市蘇原野口に伝わるお獅子様の故事

主題 義を求めつつ挫折し絶望の中になお道を求める孤高の貴人

人物 前シテ 志士

後シテ 獅子

ワキ 庄屋（初代 安積清右衛門）

場面 延宝三（一六七五）年新春未明 各務野大釜の笠松 おおがま

1 シテ 「次第」 風も冷たき夕暮は、風も冷たき夕暮は、
ゆうぐれ

語る声なく 淋しき。
さび

〔名乗り〕これは世を捨てし都人にて候。
みやこびと そつろう

虚飾の栄華に堪え難く、諸国を流れる貴人なり。
きよしよく がた しよこく きじん

2 地謡 慈しみ 増せば悲しみ なお増して
いづく

無憂園は 住处にあらず。宝蔵も 極楽浄土を
ルンビニえん すみか ほうぞう びやくらくじょうど

かえりみず この世の地獄に 御身を浸す。
おんみ ひた

〔舞台の中央に、一枝の松と、その向こうに台を置く〕

都をば、まだ夜深きに 旅立ちて、中仙道を行く末は、
よふか なかせんどう すえ

青き三井山 後に見し。ここが世に聞く 各務野か、
みいやま あと かくみの

一本松に着きにけり、一本松に着きにけり。
いっぽんまつ つ

3 シテ あれなる笠松にて、しばしの宿りをいたさと思ひ候。
かさまつ みわた いちめん か そつろう

4 地謡 見渡せば、あたり一面 枯れすすき、
みわた いちめん か

この寂しさを 何とする。

世を捨てて 旅を宿とし 幾年ぞ、志 さえ 高ければ、
見るもの全て 美しく、食するものは 美味けれど、
悲しみだけが 何故か増す。

寒くひもじい 夕暮れに、せめて 渴きを 癒さんと、
水面を見れば 異形の相、変わり果てたる 我が姿、
獅子のごとくに 荒ぶりて、道行く人には 恐れられ、
村の衆には 蔑まる。

5 シテ 志士が獅子とは 笑い種、 宿る処も
もはや無く、松の梢に 隠れけり。

〔シテは松の向こうの台に登る 〕

6 地謡 思えばあれから 幾年ぞ。

いで後悔 するまいと、心に誓いて 立ち上がり、
民の苦勞を、身に負いて、天下の道を 正さんと
君を諫めて みたものの、逆鱗恐れて 友は去り
後に従う 者も無く、縁者を失い ただ一人、
一本松に 風が吹く。

7 シテ いで後悔 するまいと、覚悟を決めて
おきながら・・・、この侘しさを 何とする。

8 地謡 志賀辛崎の ひとつ松、 つれなき人の 心でも、
松は季節に 色変えず。徳は孤ならず 犀の角、
ただ独りにて 歩めよと、仏の教えに 諭されて、
一本松に 身を寄せる。
〔曲とともに登場したワキが橋掛かりで名のる 〕

9 ワキ 「名乗り」 これは 野口村の庄屋にて、

名を清右衛門と申し候。

先祖は貴き 人なれど、今はこの地に落ちぶれり。

10 地謡 噂に誘われ 訪ねれば、伽羅の薫香も 懐かしく、

足を留めて 見上げれば、松の梢の その上に、

佇む姿も 恐ろしい、異形の方が おわします。

11 シテ 松の梢に 隠れたる、異形の姿が なぜ見える。

12 ワキ 隠れた徳こそ 明らかに、光を放つと 申します。

13 シテ ムフフ： 齒の浮くことを いうものよ。

14 ワキ 恐れ入りましたとございます。

15 地謡 天道様の 導きで、めぐりあいたる 貴方様、

不思議な縁を 感じます。何方様かは 存ぜねど、

御用があれば 遠慮なく、申し付けて くだされば、

真心尽くして 仕えます。

16 シテ 真心尽くして 仕えると、懐しく聞こゆ その言葉。

会ったことも ないはずの、そなたは一体 何者じゃ。

17 ワキ 安積の杜の 住み人で 清右衛門と 申します。

18 シテ その昔、都にありて 世に仕え、

天下に道を 示したる、高き志操の 人ありき、

海のごとくに 学深く、大地のごとく 信厚し。

その末裔と 申すのか。

19 ワキ 忝くも 畏くも、心にとどめ 下されし、

先祖のことを お聞きして、心が熱く なりました。

20 シテ 思えば今から 幾星霜、音に聞こえし その人は

21 地謡 世の歪みをば 糺さんと 乱れる天下に 道を説き、

義勇をもちて 戦えど、武運つたなく 破れけり。

世を退きて かの地にて、静かに暮らす 身とぞ聞く。

22 ワキ よくぞ尋ねてくださいました。

23 地謡 静かに暮らす その身とは、

彼方の森のあの辺り、堀を廻らし 門を建て、

櫓を構えた 館にて、庄屋を務める身でござる。

24 シテ 庄屋とな… 何と安積も 落ちぶれて。

その昔、天下に轟く その人が、庄屋の身とは いたわしい。

25 ワキ 恥じ入るばかりにございます。

〔シテは自らの失言に気づいて取り繕う〕

26 シテ いやいやいや、恥じ入ることは 露もない …。

27 地謡 その露も 朝に結び 夕に消ゆ、露は実の 姿なり。

色即是空に 倣うなら、恥はすなわち 誉れなり。

矛盾を超えた その先に、真の世界が開かれる。

虚飾の栄華を 打ち捨てて、真の実に 満たされた、

豊かな里が ここにある。

黄金の稲穂に 包まれて、百姓に 慕われる、

野に咲く花の 清らかさ。

28 シテ 今は昔の あの頃に、志を 同じくし、道を求めた

伴なれば、今のそなたが 誇らしい。

30 ワキ 身に余る 遠き昔の 物語、忝くも 懐かしく、

不思議な縁の 貴方様、いったい何方で ございましょう。
松風騒ぐ 樹の上で、獅子の姿と 見受けけれど、
高貴な方と 存じます。

31 シテ 獅子の姿に 見たてられ、見上げてくれる
その人の、先祖に縁の 有る者じゃ。

32 地謡 上宮聖徳法王帝、蘇我倉山田石川麻呂公、
村国男依公、護命僧正、鏡久綱公、飯沼勘平公。

志は 高けれど、武運つたなき 時もあり、
幾百年の 歳月を、悔やんで過ごして、来られたが、
時に文禄年間に、飯沼喜入八現れて、
慈悲の心を受け継いで、飢饉の村を救いたり。
絶えることなき 志、今はそなたが 受け継いで、
この地にありと聞き及び、

33 シテ 都を捨てて ただ一人、はるばる参った 由縁なり。

34 ワキ 心にかけて 下されて、嬉しきことに ございます。

35 地謡 恩に報いる そのため、礼を尽くして 仕えます。

どうかそこから 降り来たり、我らの里に お越し出で、
どうか永らく 安らかに、鎮座くださり ますように…。

36 シテ 待っていた。そなたが来るを 待っていた。
いざ参ろうか その里へ、そなたが治むる その里の、

安積の杜と 人の呼ぶ 我らの館に 参ろうか。

〔雷鳴とともに獅子が松から降りてくる。〕

37 地謡 あな恐ろしや 畏しや、雲なき空に
雷が、落ちてくるとは 不思議やな。

38 ワキ 神も昔は 人なれば、人もやがては 神となる、

安積の杜の 神となり、導き給え、わが民を。

39 後シテ 心得た。神と祀られ この地にて、
われはお獅子と 成りにけり。

40 地謡 御世の乱れし その時に、非道の力に 屈せず、
弱きものを 慈しみ、憲を守りて 一揆なら、

天道自ずと 加護となる。神通力の 由縁なり。

41 ワキ 一揆とは たった一つの 揆。

42 地謡 円を描いて 天道は、狂うことなく 廻りくる。

その真ん中に 人が立ち、天道様を 仰ぐなら、
天下の心は 一となり、正しき道が 拓かれる。

43 後シテ 血の繋がりは 薄くとも、時を超えて
めぐり合う、志こそ 尊けれ。

44 地謡 正しき道は 険しいが その苦しみを 恐るれば、
すでにこの世は 地獄なり。この世の地獄に 身を浸し、
その苦しみを 歓べば そこがすなわち 浄土なり。

45 ワキ 正しき道を 進むなら、天のご加護が そこにある。

46 地謡 操揺るがぬ その心、それが縁で 今ここに、
時を超えて めぐり合う、志こそ 尊けれ。

47 一同 ぎやーてーぎやーてーばらぎやーてー
ばらそーぎやーてーぼじそわか。

48 後シテ いざ参ろうぞ、参ろうぞ。

49 地謡 延宝三年新春未明

そなたが治めるこの村の、
安積の杜もりの神となり、
永くこの地を加護かごしよう。

完

寺田てらだ 寺田てらだ
誠知せいち 裕ゆたか
記 伝